

スペイン留学報告

河内 裕介

本年五月に、安部舜先生と共に三浦宏平先生が留学されているスペイン・ムルシア州のアリサカ病院に短期留学に行つて参りました。アリサカ病院はムルシア州最大の基幹病院であり、肝移植は年間六〇―七〇件、肝臓外科手術は年間二〇〇件以上行われている施設です。アリサカ病院では肝移植と肝臓外科を中心にスペインの医療を学んできました。また、日本とスペインの医療の違いを感じ取ることができました。

スペインは日本と異なり移植に関してオプトアウト方式が採用されており、生体移植よりも献体移植が盛んに行われていました。幸運にも、二週間という短期留学でしたが、肝移植を四件見学することができました。術野にも入らせて頂き、間近で肝移植を見ることができました。最も衝撃を受けたことは肝移植が平均三―四時間程で終わることです。肝胆膵外科の三教授が肝移植全例の手術に参加されており、移植先進国の手術を見ることができ、非常にいい経験になりました。

日本でも脳死下の肝移植が増えてきていますが、世界有数の移植国であるスペインで実際に肝移植を見ることができました。移植医療に非常に興味を持ち、今後携わる機会があればと思うことができました。

肝臓外科の手術では開腹手術・腹腔鏡手術のほか、ロボット肝切除を見学する機会もありました。ロボット肝切除は初めてでしたが、腹腔鏡との違いを感じることもできました。また、エキノコックス肝嚢胞という珍しい疾患もありました。アリサカ病院周囲はモロッコの移民街ということもあり、年間数例はエキノコックスの症例が来るとのことでした。

スペインと日本の医療の違いとして、仕事の分担がはっきりしていると感じました。外科医の仕事はやはり手術が中心であり、手術が終われば手



術室から病棟には行かず帰宅するというのが日本では見られない光景でした。仕事の大半を占めているのは手術であり、手術に集中のできる体制になっていると感じました。スペインの手術は非常にスピーディーだと感じましたが、切開が大きく術野が見やすいことが一番の要因だと感じました。大切開の手術を行っても、術後疼痛があまりなく、すぐに食事を再開していましたが人種の差に依る所もあると思います、同じことを日本で行うのは難しいとは思いました。また、術前評価に関しては曖昧な所も感じました。肝切除を予定しているにも関わらず最新のCTが数ヶ月前であったり、化学療法後の画像がなかったりということがありました。検討会に関しても基本的に術前・術後検討は行わず、手術記録も文章のみという点は日本との違いだと思いました。

研修の合間にはスペインを観光することもできました。教会や聖堂に行くこともできましたし、スペイン料理もとても美味しく、病院での経験だけでなくスペインの文化にも触れることができ、非常に充実した研修を送ることができました。

今回、留学をする機会を頂き、外科同窓会誌で留学報告をさせて頂きましたが、この場では書ききれないほど多くの経験をすることができました。まだ医者四年目という時期に日本ではない海外の医療を目の当たりにすることができたのは非常に良い経験となりました。また、日本・新潟の優れている面、世界から遅れをとっている面の一端を感じ取ることができたことは今後の外科医人生の糧になると思います。

最後になりますが、今回スペイン留学の機会をくださった若井教授、現地でお世話になりました三浦宏平先生始め、医局員の先生方に感謝申し上げます。大変ありがとうございました。今回のスペイン留学を今後の診療・研究に活かしていきたいと思えます。

(令和四年入会)

